

哲学カフェ de ぎふ

せんしゅう

千秋まちかど文庫 通信



運営委員会発行(記録:安藤彰浩、編集:中川健史) (主宰:吉田千秋 090-7917-9602 yoshida0@sepia.ocn.ne.jp)

第171回哲学カフェ例会(2022.9.8)

《いじめはなぜおきるのか、どうしたらなくせるのか?》

「いじめが起きる根本に競争や差別があることは明らかです。そこにさまざまなストレスがあり、その解消のためにいじめが行われてしまう。根絶は難しいようだが、解消に向けて手をつなぎたいものです。」

<話題提供> 主宰者:吉田千秋

・今日はイジメ問題について考えます。10分ほど私の方から問題提起を兼ねイジメ問題の現状について話をします。その後、意見交流の参考として、実際にあったイジメを隠蔽しようとした神戸市の教育委員会及びイジメのあった当該の学校の対応を取材した(You-TubeにアップされたTBSの報道番組)“報道特集”を20分余り見て頂きます。

・イジメといっても多種多様です。学校に限らず社会の様々な場所で起きています。職場には上司の部下に対するパワハラ、モラハラ、セクハラなど色々あります。人種差別や少数派に対する暴力やヘイトも集団的なイジメと捉えることができます。今日は主として、学校の内外、教育の現場における子どものイジメの問題を議論の対象とします。イジメは決して過去の問題でも、どこか遠くの町の問題ではありません。2019年に、東長良中学で3年生の男子生徒がイジメを苦に、マンションから飛び降り自殺をしました。

・2022年に発表された文部省の調査によれば、2020年度のイジメ認知件数は前年比で約10万件減の51万7163件でした。減少はコロナ禍で子ども同士の接触機会そのものが減少したためと考えられます。ただし、パソコンや携帯電話で他の生徒を誹謗中傷するネット上のイジメは急増し過去最多を更新しています。認知されたイジメの8割以上(42万897件)は小学校で起きていて、中学(8万877件)、高校(1万3126件)と上級の学校では少なくなっています。

・何をイジメと捉えるかの考え方は変わってきています。従来の定義に比べ、次の点に注意しなければなりません。イジメは一定の人間関係にある生徒同士の間で起きるものですが、弱者と強者の関係は不動の固定したもの

ではなく、立場が逆転する場合もあります。成績の良い悪いも、容姿が良くても悪くてもイジメの口実になります。また、イジメは、継続的なものばかりでなく、一時的なものもイジメとして認められます。さらに、苦痛が深刻でなくてもイジメはイジメと見なされます。加えて、起こった場所は学校に限定されません。政府が端末の普及を進めた結果、ネット上でのイジメが急増した点に留意しなければならず、生徒一人ひとりのネット・リテラシーを向上させるなど、新しい環境に対応する必要があります。

・2019年東長良中学であったイジメ自殺事件では、加害生徒3名が強要の容疑で(内1名はそれに加えて恐喝と暴行の容疑)家庭裁判所に送検され、校長、教頭、学年主任及び担任の教師が懲戒処分(減給)を受けました。この問題については学校側からの十分な説明もなく、親・住民から様々な疑問が寄せられました。特に注目されるのは、イジメが悲惨な結果を招く原因には、教師・学校側の認識不足があるのではないかという指摘と、学校や教育委員会が保身のために事実を隠蔽したりする誤った対応に対する批判でした。

・そこで、意見交流の前に、TBS作成の報道番組“報道特集”を見て頂きます。この番組は、17年前に神戸市で実際にあったイジメ事件を神戸市教育委員会が隠蔽しようとした問題を、イジメ被害者を含む事件関係者に直接取材して作られたものです。



＜“報道特集”の要約＞

取材チームは学校が生徒に対する詳細な聞き取り調査を基にして作成していた報告書を入手していた。2006年被害者は当時小学校5年生、同級生13人からイジメを受けていた。被害者Aさんは同級生13人から嫌がらせ暴行をされ、さらに恐喝を受けて親の財布から抜き取ったお金を同生徒たちに渡していた。イジメは1年ほど続いたが、Aさんの父親が気付いて学校に報告したため終わった。

学校側は被害者Aさんを始め、イジメ行為に関わった生徒に聞き取り調査を行っていた。13人の内10名はイジメの事実を認め、謝罪文を提出した。Aさんの両親はイジメを認めなかった3人を相手に裁判を起し、2009年当該生徒13人全員のイジメの事実が公式に裁判所によって認められた。しかし神戸市の教育委員会は裁判後もイジメの事実の認定を拒んだ。

学校側は詳細な調査報告書を作っていて、その報告書からイジメの事実が明確で、校長はAさんの父親との最初の遣り取りで事実関係を認めていたが、数日後、態度

を一変させた。教育委員会から圧力が懸ったものと思われる。教育委員会は被害者AさんにAさんの親の希望で直接聞き取りが出来ずに事実関係の確認が取れなかったと主張した。しかし取材チームは関係者から内部文書を手に入れた。それは学校側が委員会に提出したイジメの事実を明らかにする詳細な調査報告書だった。委員会は明らかに事実を把握していたが、その認定を拒んでイジメの存在を隠蔽した。

加えて、教育委員会は、秘かに、学校側の作った報告書を意図的に改ざんし、Aさんの両親が無理矢理イジメを認定させようと圧力をかけていた、という印象を与える偽造した報告書を作成していた。なぜ委員会はそこまでイジメの事実を隠そうとするのか。事件が起こる前の前任の教育長は、当時の教育長が就任した直後、神戸の高校の柔道部で部員が部活動の際に指導する教員の暴行で亡くなる事件があって、不祥事が連続しているという印象を持たれたくないという自己保身の心理が働いたと、特集では指摘している。

＜意見交流＞

* “報道特集”を観ると、イジメの現場となった学校の教師は、少なくとも当初真っ当な仕方に対応した。しかし教育委員会の指示で、学校側は事実を公にしなかった。学校や教育委員会の間は、一人の独立した人格ではなく、役人として、組織のメンバーとして行動している。そこにまず問題がある。現場の人間に権限を与えて、問題が起こったら現場で責任を持って対応するという体制を作る必要がある。

* イジメは多くの場合、当事者以外の者からは見えにくい。クラスの誰かが仲間外れにされても、中々、分からない。教師は通常、生徒の間で起きていることを知らない。気がつかなかったとしても咎められない。通報があってからどう責任を持って行動するかが重要である。

* 子どものイジメは大人社会で起きていることの反映である。学校だけでなく、多くの職場で心の傷つく様なことが頻繁に起きている。仕事が出来なければ公然とけなされる。

* 教育委員会は何て恐ろしいところなのか。“報道特

集”が取材した様な隠蔽は、他の多くのところでも起きているのではないか。番組の様に、ただ事実を隠蔽するだけでなく、被害者の側を悪者にする何て酷過ぎる。戦後社会で尊ばれた民主教育の理念や精神はどこへ行ってしまったのか。

* 大人社会のイジメもひどい。他人を妬んだり、ひがんだりすることがイジメにつながる。職場で良い車に乗っていたら、ただそれだけで嫌われた。子どもの時も、ちょっと高価なものを持っていると、仲間外れにされた。

* 親の都合で転校を繰り返した。そのためか学校で誰かと特に親しくなることもなかった。一人でいても仲間外れになっていると思わなかった。イジメの経験もない。後に高校の教師になったが、教師の立場では、生徒のやり取りを正しく見極めることは難しいと感じた。仲間の中で誰かがただ単に“いじられている”のか、本当にイジメが起きているのか。からかいが半ば当人に受け入れられているなら、それはイジメではなく、ただ“いじられている”ということになる。



とはいえ、この二つは密接に結びついているので判断は難しい。

* (吉田) イジメの定義は以前と違って、被害者の認識が判断の前提と見なされるようになってきている。害を加える者たちがイジメの認識を持っている、いないに関わらず、被害を受ける当事者が苦痛を感じていれば、それはイジメと見なされる。イジメには4つの極があってからみあった構造を成している。直接関わり合う加害者と被害者に加えて、二つのタイプの第三者である。一つは見て面白がっている者たち、もう一つは巻き込まれない様に見て見ないふりをしている者たちである。後者は、消極的であれイジメを容認可能にしている存在であり、イジメ問題を考える上で、忘れてはならない重要な役割を演じている。また、誰がイジメの対象になるのかは、決まっているわけではない。被害者は概して周りの人間と異なる特徴を持っているとも言われる。異なるものは何でも構わない。例えば、家庭が貧しい場合だけでなく金持ちの場合も、貧相な服装だけでなく目立つ服装をしている場合も、背が低いか高いか、太っているか痩せているか、あらゆる特性が中傷、妬みの材料になり、イジメの対象となることを知っておく必要がある。

* イジメは時代を反映した社会現象である。イジメには陰湿でサディスティックなものがある。昔はその種のものは無かった。特に男子生徒たちは、しばしば一緒に悪さをしたり、殴り合いの喧嘩をしたり、突っ張ってじゃれ合い、つるんでいた。昔の人間は民主主義の教育を意識していた。人間はもともと皆同じと思っていた。経済的に豊かになったが、格差が大きくなった。特にバブル以降、成功した者とそうでない者との違いが著しくなった。イジメは、他人に対する妬みや、ひがみの感情が悪い方向に発展したものではないか。

* よく指摘されることは、イジメの背景にストレスがあるということ。会社の中でも、学校でも、社会全体で、個人にかけられる精神的な圧力が大きくなっている。どんなことでもストレスの原因となり得る。個人的な身心の不安・悩みだけでなく、戦争という現実の危機や地球温暖化という環境危機などの大きな問題も個人にとって心理的な抑圧の原因となりうる。ストレスの要因を全部なくすことはできないが、少しでも減らすことが重要である。

* ストレスの要因は様々であり、通常は複合的な背景がある。ストレスの増加は少数派に対する思いやりや配慮が社会全体に欠けていることとも関係しているのではないか。また、イジメを無くすことも重要だが、イジメに対する対応を教えることも必要である。

* 子どもたちをみていると、小学校に上がる前は、互いに素直で屈託がなく、自然に仲良くできる様に見える。学校に入って学年が上になるにつれて、我が強くなり子どもの間に壁が出来て、気持ちを通わせることが困難になるようだ。自分の子どもは周りに気持の通い合う者がいて恵まれていた。イジメは共感し合うことが少ない場で起きるのではないか。

* 他人を思いやるためには、心に他人の気持ちを考える余裕がなければならない。日本の学校は成績重視で、子どもは常に結果を出すよう上(教師)から圧力をかけられる。学校が子どもを自分の考えを持った独立した人格として扱わない。これは学校に限ったことではない。大人たちも職場で人格を無視した扱いを受けている。社会全体の歪んだ構造が圧力を生んでいる。

* イジメは経験しなかった。でも喧嘩はよくした。互いに実力行使で、心の傷の様なものは残っていない。子



どもの喧嘩の場合、間に入って止めさせようとする者がいる。大人はたいてい見て見ぬふりをして関わらない様にする。

* イジメを生み出す様なストレスはどこから生まれるのか。企業でも、学校でも競争を強いられる。良い成績であれば褒められる。良く無ければけなされる。私たちは当然の様に競争に駆り立てられる社会で生きている。これが未音大の根っこではないか。

* 心を通わせるにもスキルが必要である。結構、難易度が高い。イジメは家族の生活に大きな影響を与える。イジメで学校を中退した者は全く異なる生活をせざるをえなくなる。学校に行かない者が家にいれば、家族の生活が乱される。問題を社会で共有して家族を支える必要がある。

* 気持ちの通い合いが無い所でイジメが起きる。そ

れは理解できる。フィリピンで孤児院を訪問する機会があった。多くは親に捨てられた子どもたちである。共同生活で助け合って生きている。そういう所ではイジメは起きない。

* イジメは学校だけで終わらない。被害者はイジメの体験を引きずって人生を送ることになる。大人になっても、他人が怖いから外に出られないという者もいる。イジメを体験した者は他人と上手くやれない。結果として外出せず孤立した若者が増える。その一方で一人暮らしの高齢者が増えている。助けが必要になっても、周りに助ける人がいない。弱い立場の者がバラバラになって孤立している。イジメが影を落としているとも言える。

* イジメを経験した。10代でイジメにあつて、学校に行けなくなった。今にして思えば、自分を支える自己肯定感があれば、対応できたと思う。自分はこうあるべきかという意識が無くて、周りの人間に左右された。自分の心が弱くて対応できなかった。

<意見交流の最後に> 吉田千秋

・今日は色々の体験を聞くことが出来て理解が深まりました。イジメの問題を理解する上で気をつけなければならないことがあります。加害者の立場と被害者の立場は決して固定的なものではないということです。ストレスがイジメの背景にあると言われます。私たちのほとんどが社会生活の中で絶え間なくストレスを感じる状況に置かれています。このストレス解消のためにイジメが起こされるのですから、誰もが加害者にも被害者にもなる可能性をもっています。

・被害者がイジメを受ける期間は長い人生の短い間のことに過ぎませんが、イジメの体験は通常、彼のその後の人生において長く引きずられることとなります。発言にもありましたが、イジメを受けた人は「他人を信頼することができない」と思うだけでなく、「自分自身をも信頼することができない」と言います。イジメを根絶することは困難かもしれません。上下関係、争い等の無い社会は簡単に実現するものではありません。しかし、それをできる限り減らす努力を怠ることはできません。私たちは一人ひとりが自信を持って生きられる社会をめざしたいものです。そのためにも、

自己肯定感を持てるようにすることが重要です。

・そのために他人の痛みを理解する力を身に付ける必要があります。保育園では誰か一人が風邪をひくと皆がわかります。これは「他人に迷惑をかけない」、「他人の痛みを理解する」ことの実体験場だと言えます。だが、こういう体験もない場合、どうしても自分本位にものごとを見てしまう場合が多くなっています。とりわけ、いろいろな分野や領域で相対的に上の立場にある者は、しばしば周りが視野に入らなくなります。下の者によく見えるものが上の者には見えなくなるのです。

・日本の政治家は庶民の痛みを理解していません。イジメを始め教育関係の問題では、教育委員会の対応がしばしば注目を集めます。これは戦後の民主教育の中で生まれた制度で、教育委員は当初は選挙で選ばれていました。しかし次第に行政が教育委員会を管理下に置く体制に変わって行って、教育委員会の自立性・独立性が失われてしまっています。教育が政治に従属し、国民本位の平和・民主主義・人権尊重を軽視しているところに、根本問題が宿っているように思われ



ます。
・イジメの問題は弱い立場の人間の問題です。イジメの問題に取り組むことは、子どもたち一人ひとりを見守って大事にするこ

とです。競争社会で支配的となりがちな「自分だけ」、「自分は上」という在り方を克服して、社会の底で支えている私たちが力を合わせる必要があるように切に思います。

<9月例会感想、意見、便りなど>

○<児童虐待と統一教会問題>

児童虐待が問題化した時、虐待を受けた経験を持つ人が大人になって子どもを設けた場合、我が子に対しても虐待してしまうという傾向が言われていた。

現在大きな問題となっている旧統一教会問題も、その端緒となった安倍元首相襲撃犯山口被疑者とその母など一家が被った反社会的行為の経緯の中に、同じ構造を見ることができるようになる。

母親の入信きっかけは、夫(被疑者の父)の経営する事業の行き詰まりや身内が重病を患ったなどの不運?の連続と、そこからのストレスだった。その元はサタンの呪い?と信じ込まされ、不幸から逃れるための献金から地獄?にはまりと家族の崩壊に繋がった。また、この教会の信者の多くは、同じようなストレスを抱えた市民に近づき、新たな犠牲者?を作っていく悲惨なスパイラルが展開されていた。虐待を受けるとか、不運・不幸に直面した人を孤立させず、そのストレスをどう回りの者が包み込み、社会的な問題として解決する必要を痛感する。(F・W)

○<まともな大人社会に>

「いじめ」の問題に意見をと問われて、とりとめのない抽象的な発言をしてしまいました。その後、本当に言いたかったことは何だったかなと考えておりました。

大人の世界が「まとも」である事が大事ではないかということ言えばよかったです。 「まとも」とは、「あたり前のことがあたり前である社会」「人の命や権利が守られる社会」「ルールがちゃんと機能し守られる社会」ということでしょうか。

様々ないじめの事例を聞くと「こんなことをしては駄目だ」とか、「これは人権無視だ」というようなことが多くあります。社会全体が揺らいでいるために、子どもたちの規範となるものが揺らいでしまうの

ではないでしょうか。

権力さえ手にしてしまえば何でもできるというような政治が子どもたちを取り巻く世界では、「してはいけない」「やるべきではない」ということを子どもたちが自覚することは難しいのではないのでしょうか。子どもだけでなく大人もそうですけれど。

(A.Fujiwara)

○<いじめの認定より、人間形成の観点を>

9月例会の「いじめ」問題については、切り口がうまく掴めなく、発言がスムーズにできなかった。個人情報に壁に阻まれるのと同時に、学校関係者の責任問題を回避したい意図とによってうやむやにされてしまっている気がしてならない。第三者委員会を作っていじめ撲滅と言いながら、「監視」を強めるという方向性しか私には見えてこない。「いじめ」と認定するとかしないと、そんな話に終始しているように思う。人間形成に関わり、時代と共に変化する教育(社会・学校・家庭)を検証するべきである。

別の視点から見ると、昨年の「平和のつどい」でピアニストの崔善愛さんの話を思い出す。「人間は、自分のことはわからない。鏡に映った自分の姿しかみえない」。日々、この言葉を反芻し、どうしても人と比べてしまう自分を否定できない。個人差はあるが「妬み・そねみ」をしてしまう自分に気付くかどうかがかぎのように思うが、あなたはどう思いますか。

(ひらつか)

○<いじめの問題とストレス、差別>

これは一筋縄では、いけそうにない深刻で普遍的な課題と考える。人類進化の過程で今日に至るまで、「適者生存」「弱肉強食」の原理が働いているような気がする。人間はおろか生物はすべてそのストレスから、解放されることはない。現代社会の「いじめ」は多岐にわたり、生徒と教師を含む、教育現場と権力的で

支配的な教育委員会と文部科学省、労働者の人権を拘束する企業組織、性差別を含めたあらゆるハラスメント、LGBTに対する偏見と人種差別、家庭内での父権性暴力、などなど、「いじめ」が発生する社会的構造的要因は、枚挙に暇がない。したがって、こと教育現場に絞ってみるならば、教育機関は「いじめ」は日常的な不可避の問題として受け止め、生徒、保護者、教師、教育委員会などが、その都度、忌憚のない話し合いの場を持ち、情報の隠蔽ではなく、情報を共有し、公開するシステムを、制度的に日常化させることが大事ではなかろうかと考える。「いじめ」をなくするにはどうしたらよいか、幼児段階から、現場教育の一環として、関係者の話し合いの文化を育てることが、大人社会での「いじめ」の根絶(?)につながると思われる。(MS)

○＜岐阜県条例と統一教会＞

旧統一教会に関連して最近話題になりつつある「家庭教育支援条例」であるが、岐阜県では既に2014年に制定されていた。2014年制定当時の提案者は11名。(県政自民クラブ8名、県民クラブ2名、公明党1名)。この条例にいたる経緯は「旧統一教会は地方議員に食い込み家庭教育条例などを推進する政策で地方議会から声をあげさせて、国政に反映してきた」(政治アナリスト伊藤敦夫氏談)。

2017年には「家庭教育支援法」をめぐる、安倍元

首相を会長とする「家庭教育支援議員連盟」を発足、自民党総務会を通過、国会提出の方針がモリ・カケ問題で見送られた。全国では10県(岐阜県含む)6市が制定した「家庭教育支援条例」は自民党と統一教会の連携で「家庭教育支援法」を促進のための政策である。

尚、岐阜県「家庭教育支援条例」では他県の条例と異なり、他県の「基本理念」にある「家庭教育の自主性を尊重しつつ」という文言がない。これは大きな問題であり、今後の課題。(井口)

○＜なぜ3才女子児童は送迎バスに放置され死亡したのか＞

日本では憲法はヨコ社会なのだが、生活はタテ社会のまま変わっていません。だから、理事長兼園長の行動をチェックし注意できない。ましてや派遣職員は、だいたいいのちを預かっていると意識が園長や園の従事者たちにあるのうが。“保護者”というのは園児たちの保護者だけでない。園児を預かった時点で、園児の保護者は園側になり、園の従事者全員が保護者になるのです。

ところが、タテ社会の現実では責任はつねに下の者に押しつけられるのです。社会に露見すると上席の者が謝罪するが、4、5日もすれば元の木阿弥。憲法の示すヨコ社会の実現を望みます。

(こうこうぶん わへい)

＜この一本＞ 川瀬美香監督「長崎の郵便配達」(2022年8月全国公開)

第2次世界大戦下英国空軍戦闘機パイロットの英雄と称えられたピーター・タウンゼントは、戦後ジャーナリストとなり世界を回中、長崎で被爆者・谷口稜睡(すみてる)と出会い核兵器の悲惨さを知る。そして彼の被爆体験とその後をノンフィクション小説「THE POSTMAN OF NAGASAKI」として1984年出版した。谷口は郵便配達の途中で被爆し、背中一面に大火傷を負い1年9ヶ月うつ伏せのまま治療を受け、その後郵便局に復職。ほどなく核廃絶運動に参加、自らの大火傷の写真も使い世界中で核廃絶を訴えた。書名は谷口の職業による。

この映画はタウンゼントの娘でフランスの俳優イザベルが、父親の本を読み返し、同書や父親の取材メモ

などを手掛かりに、家族(夫・娘)と長崎を尋ねて父親の取材を追体験する姿を描く。谷口の遺族や被爆体験者、父親の取材時の通訳らと会い、原爆資料館や浦上天主堂、谷口の被爆場所やその家族との思い出の場所などを歩き、原爆(核兵器)の非人道性について考えを深める。そして彼女が帰国後娘の学校で受け持つ演劇プログラムで、原爆の恐怖を表現するミュージカルを演出・上演するところで映画は終わる。



タウンゼントが空軍の英雄とされた母国イギリスも結婚後に暮らしたフランスも、核兵器に依存する国家であり、彼にとって核廃絶は自明ではなかったはずだ。しかし長崎を訪れ、核兵器の恐ろしさを知ってそれを世界に伝えた。映画で彼の足跡をたどるイザベ

ルも父親と同じ思いで、子供たちにそれを伝えた。戦争での唯一の被爆国日本に住む私たちと、我が日本国政府が果たすべき役割を改めて感じた97分だった。(井川敏郎)

〈この一冊〉 高橋源一郎著 『ぼくらの戦争なんだぜ』(朝日新書 2022年)

ロシアが2月24日、突如ウクライナに侵攻を開始した時には本当に驚いた。二度と戦争は起きるはずがないと根拠もないままにどこかで思い込んでいたからだ。さて、本書はそのように平和ボケしていた当方に改めて戦争について考える機会を提供してくれた。

といっても難しい理屈がこねられているわけではない。全編5章編成で、章ごとに異なるテーマが取り上げられているので、好きなところから読めばいい。当方が興味をもって読んだのは第一章と第二章。第一章では、教科書には何らかのメッセージが込められているという鶴見俊輔の教科書論が紹介され、続いてドイツとフランスの高校の教科書が取り上げられる。ドイツではナチスドイツという自分たちの過去との徹底した対決のうえに、その歴史を高校生に学ばせ、考えさせる。

他方、フランスはナチスに占領され、ユダヤ虐殺に加担したが、終戦の前年に連合軍とレジスタンスによって解

放されたこともあって、ナチスに加担したという事実にはながらく目をつぶってきた。その反省のうえに、過去だけでなく、それに続く戦後から現在に至る「国家」というもののありようをどう考えるのか、という問いを高校生に突き付けるのだ。

第二章は戦争詩が取り上げられ、「大きいことば」と「小さいことば」というタイトルがつけられている。大きな声で大きなことを言う人にはしっかりと耳栓をしたほうがよさそうだ。

(へいわげ)



〈この一冊〉 エーリヒ・ケストナー著、ヴァルター・トリアー絵「どうぶつ会議」

(岩波子ども本)、1954年刊、2022年第30刷

本書は、『エーミールと探偵たち』で著名な世界的作家ケストナーの作品だが、ロシアのウクライナ侵攻とその激化の中で、あらたに注目されています。

第二次世界大戦後に世界平和のために国際会議が開かれますが、まったくまとまりません。動物たちは怒り、世界中から代表が集まって、北アフリカで会議を開くことにしました。スローガンはただ一つ「子どもたちのために」で、国境をなくすこと、軍隊をなくすことなどを要求します。

人間たち(政治家、軍人)ははじめて意見一致し、断固拒否します。だが、動物たちは、むやみに記した書類をすべて破ったり、将軍たちの軍服をはぎ取ったりし、あれやこれやと要求を迫ります。最後には、世界中の子どもを連れ去って隠します。とうとう人間たちは屈服して動物たちの要求にサインします。

ユーモアもまじえたこの架空の話は、子ども向けに書かれていますが、大人たちも十分楽しく読むことができるし、考えさせられます。付け加えておきたいのは、すばらしい挿絵です。何百匹と登場する動物たちの表情やしぐさが独特なタッチで描かれ、これだけでも堪能します。この機会にぜひ手に取って、読んだら子どもたちに回してあげてください。

(sensyu)



哲学カフェ 第28期(2022年後半)例会予定 *毎月第2木曜日、午後7:00~9:00 ふれあいスペース
⇒ コロナ警報で中止の場合あり、テーマも変更あります。連絡下さい。

第171回例会 9月8日(木)	「いじめはなぜ起きるのか、どうしたらなくせるのか？」 * 子どもの世界でも大人の世界でも様々ないじめが次々と起きている。 * なぜいじめは起きるのか。どうしたらいじめはなくせるのか。あらためて考え	終了 しました
第172回例会 10月13日(木)	「 信教の自由と政治的利用の問題を考える 」 * 旧統一教会(協会)と自民党などの関係で浮き彫りになった宗教と政治の危うい問題。 * 宗教活動も無制限ではなく、不法な反社会的活動は罰せられる。この点が重要です。	
第173回例会 11月10日(木)	「 戦争危機と気候危機、どうつなげて打開するのか? 」 * ウクライナ戦争が長期化する中で、気候危機の問題は忘れられたようである。 * でも「戦争は最大の環境破壊」でもある。あらためて二つを結びつけて考えてみたい。	
第174回例会 12月8日(木)	「 危機の時代の2022年をふりかっ て」 * あらたな戦争だけでなく、今年は21世紀に入って最大の危機の時代であったと思われます。 * いまだ先が見えない温暖化問題、永続化する感染症、何と云っても世界の分断、これらをしっかり捉え直しましょう。	

哲学カフェの運営資金の協力も、よろしくお願ひします。

口座記号・口座番号 00810 1 142912

加入者名 哲学カフェ de ぎふ、千秋まちかど文庫

「哲学カフェ de ぎふ」ホームページ 毎回更新中!!

<http://tetsugakucafegifu.jimdo.com/>

右のQRコードをスマホなどで読み取ると、「哲学カフェ de ぎふ」のホームページが開きます。ぜひ閲覧願ひます。友人・知人に拡散いただければ幸いです。



わいわいがやがや



アラカルト

★「月日は百代の過客にして行きかふ年もまた旅人なり。」芭蕉ファンなら、どなたでもご存知、「奥の細道」の冒頭の一節。20年ほど前に、定年を迎えたとき、「人生は戦い」という思いからようやく解放されると思ったものです。

★Life is journey. とは、誰が言ったか知らないが、これからはちぎれ雲に誘われるように、旅をして、自由で気ままな余生を楽しめるものと思いきや、これは浅はかな考えだった。

★実は、先輩の紹介で、地方の私立大学で、8年間、学部学生教育に従事することになったが、振り返ってみると「悪戦苦闘」の毎日であったような気がする。

★少子化時代の今日、私立大学は有名大学を除きどこでも、経営問題に直面している。学生募集定員を満たすだけの入学者の確保が大事だ。

★しかし受け入れた以上は、退学者ゼロ・100%の卒業率と100%の就職率の達成が課題となる。就職後のフォローも大事で、100%の定着率が望まれる。これらの「100%目標」にむかって先生たちは師走でなくとも東奔西走である。

★基礎学力がなくキャリア意識の低い学生はどうしても勉学意欲がなく、授業欠席が多くなる。すると、先生たちは3回以上欠席した学生の下宿や家庭訪問を余儀なくされる。はたまた、人生の苦悩から絶望し、自殺に追い込まれたりする学生が出てくると、全学的な問題となる。

★教育現場で大事なことは「希望を語ること」だった。しかし、悪戦苦闘のさ中、本当に希望を語る事ができたのか、忸怩たるものがある。

★それにしても、今の世の中、大人たちは、若者に将来の希望を語ることはできるのであろうか? まだ楽隠居できそうもない昨今である。

(島田幹夫)